

掌の物語 vol.1

2023年7月発行

創作者たちが紡ぐ 手のひらほどの物語

 Dounats

人魚は何故死んだのか

みかげ

さく退屈な港町では一種のミステリー、あるいはゴシップとして扱われていた。そして地元紙よりも噂のほうが早く飛び交うのも忘れてはいけない。しかしジンジャーは賢い子であったので、尾ひれのついた噂などは丸呑みにせず、地元紙が報じる情報をじっと待つことが出来た。

*

クリスマスが間近に迫る頃だというのに、ジンジャー・ハーネットはダウンコートに身を包み、買ったばかりの紅茶（十分後にはアイステイーになる）をカフェテラスで啜りながら新聞を読むのが日課だった。目の前には海が横たわっていて、無数のボートが支柱に括り付けられている。

この近辺で海遊びはできないが、朝日に照らされ青々とした景色を眺めるのであれば、港町じゅうを探してもこのカフェテラス以上の場所はない。

ジンジャー・ハーネットはハイスクールで人魚学のプログラムを取っている。今や人魚は絶滅の危機に瀕している。今朝の地元紙では、昨日とある漁船の網に人魚の死体がかかったと大きなタイトルで一面を飾っていた。今年で三回目、昨年は二体、その前の年も二体。それまでもなんらかの明確な理由でたまたま死体か網にかかっていたが、それは数年に一度の話で、突然数が増えたものだから、この小

ハイスクールの校舎に入って真っ先に向かったのは、非常勤のブラネール教授のもとだった。彼は四十代で、一般的にイメーシする教授と反する、背がすらっとした上品な出で立ちをしていた。それから数々の大学の研究室、ラボ等に頻繁に出入りしており、この学校の人魚学のプログラムの講師でもあった。

「おはようございます、ブラネール先生。また死体がかかったと。」

ジンジャーは開口一番、切り出した。
「死因は未だ不明。外傷もなし、内部損傷も、誤飲もなし。比較的まだ若い人魚であり、老衰でもない——間違いはないですか？」

「ハーネットは相変わらず優秀な生徒で鼻が高いよ。」
「光荣です。」

「情報元は地元紙かい？ まあ、おおむね正確だ。そう、三年前から立て続けに見られる人魚の死体はどれも死因不明。さまざまな憶測が飛び交うが、君は他の若者に比べて情報の扱いに極めて慎重だ。」

「先生の褒め言葉をきつそく裏切るように申し訳ないのですが、以前から主張している通り、私は環境汚染だと考えているのですが。」

ブラネール教授は顎に手をあて、ひとつうなずいた。

「もちろんその説を唱える人もたくさんいる。ハーネットは環境汚染だと考えている。けれどそこに根拠はない。」

「そうです。それを証明するための根拠がないんです。：

先生、やっぱり私は人魚の死体が見たいです。人魚を直接見ずに人魚学を真に学べるとは思えません。」

ジンジャーは内心苛立っていた。これまで何度も首を横に振られ続け、そして今回も同じだろうと考えていた。そしてジンジャーの予想通り、ブラネールは悩ましげに眉を下げ、首を横に振るのであった。

「ハーネット、君はまだハイスクーラーだ。正直、綺麗な死体とはいえ、刺激が強すぎる。生物学的には人間とも魚ともまた独立した生体だが、見た目の上半身は人間そのものだ。そんなものを独断で見せてやれないんだよ。」

ジンジャーは口を噤んで沈黙をおろしていた。ブラネー

ル教授はジンジャーの左肩を叩き、明るい声で続ける。

「何度も言うが、君はひときわ勤勉で優秀な生徒だ。熱意もある。きつと望んだユニバーシティで、望んだ研究ができるだろう。君を必要としている人たちが必ずいる。それを待ちなさい。何事にも順序とタイミングがある。私はね、ハーネット。年齢、性格、勤勉さ、そして人間としての成熟——そういうものを鑑みて言っているんだよ。故に今は時期尚早というものだ。」

「……わかりました。お時間ありがとうございました。」

*

ジンジャーが生まれるよりずっとずっと昔は、港近辺でも人魚が見られたらしい。かつては『人魚と暮らす町』と呼ばれていた。それが名前だけになり、更に塵だけが残って今の町の名前として呼ばれている。晴れた日の朝は穿つようなヨットブルー、昼は宝石のように輝くエメラルドグリーン、夜はミッドナイトブルーの真上に月と星が輝く。「私の目に映る海はまだこんなにも美しいのに、人魚はどうして離れてしまったのだろう。」とジンジャーはいつも考えていた。

*

ジンジャーは泳ぐ人魚を見たことがある。幼い頃、人魚を見るツアーのようなものに両親に連れられて乗ったボートから落ちたのだ。ボートはすぐに止まり、幼いジンジャーも救命具はつけていたが、潮が早かった。遠くなつてゆく両親の声。恐怖でがたがたと震え、腹の底から出したツモリの助けてという言葉は蚊のような音量だった。

ボートが小指の爪ほどの大きさになった頃、突然ジンジャーの小さな体が潮の流れに逆らい始めた。いつの間にか二人の人魚がジンジャーの身体を抱いていた。そして潮の流れなどものともせず、ボートのほうへとぐんぐん進んでいく。髪は長く、ポテリーを想起するつややかでなめらかな肌、水晶を嵌め込んだような瞳。ジンジャーは運ばれているあいだじゅう、二人の人魚に見惚れていた。その存在への圧倒感や奇跡、畏怖。そういった類のものを、幼いジンジャーはまだ幼い感性で、幼いなりに感じたのだ。

その一瞬の体験は、人魚学の道を志すのに十分な理由だった。

*

「デイルスはティーカップを両手で持って、ジンジャーを見上げた。」

「あんたも人魚に魅了されているんだね。人魚はいつだって人間を魅了させるんだよ。美と恐怖を同時に備えている存在だから。人魚は大昔から文学、絵画、音楽などで描かれてきた。学問にさえなった。人魚は人間の発展とずっと共にしてきたのさ。まあ、彼女たちからしてみればはた迷惑な話か、はたまた良き隣人か、計りかねるところだけども。」

「雨音が窓を叩いて小気味よい音を立てる。風がごうごうと吹く。日が落ちきるといふのに雨は強くなる一方で、マスターが閉店作業をしながら「雨が弱くなるまで雨宿りして行きなさい。」と気を利かせてくれたのだ。窓際のソファ席はこのカフェのなかでも特等席で、そこに座れると、ジンジャーのその日の嫌なことは全て清算されて『最高の日』になる。だから今日は『最高の日』だ。」

「デイルスだって人魚を絵に描いていたじゃない。見たいと思わないの？ 本物を。」

「そりゃあ見られるもんなら見てみたいさ。だけど二ヶ月分のバイト代を払って、三時間ボートに乗って、現れるかどうかも分からない人魚を見に行こうとは今は思えないね。あたしは芸術専攻だから死体だって興味が無いわけじゃない。」

いけど……けどそうさね、そう考えると幼いあんながポトから落っこちて人魚を助けられたのは運命だったのかも知れないね。結局、人生の舵取りは自分ではなく神様ってどこか。」

デイリスは頬を膨らませた。ジンジャーはなんとなく、窓の外に目を向ける。街灯の柔らかい灯りが雨雲を照らし、濡れた煉瓦は鏡のように輝いている。

「神様がいるのなら訊いてみたいわ。人魚は何故死んだのか。」

*

ジンジャーは息苦しきにもがいた。このまま海の底で死ぬのだと思った。助からないと知った途端、身体は死への抵抗をやめ、苦しさが全身からすうっと抜けていく。そして死が甘い匂いをさせて近寄ってくる。

意識が遠のく中、目を閉じてその時を待っていたジンジャーは、唇に冷たいなにかが当たったことに気が付いた。重い臉を持ち上げると、どこからかやってきた人魚が口腔を通してジンジャーの肺に空気を送り込んでいるのを理解した。人魚の瞳はやはり水晶のようで、深い海中ではインディゴブルーになるらしい。つややかでなめらかな肌、陽

に反射する海面のようにゆらめく長い髪——幼い頃見た人魚の記憶と何ひとつ変わらない存在が、目の前にあった。脳に酸素がまわり始めると、次第に意識がはつきりしてきた。そしてジンジャーは思う。

——生きなければ。彼女たちのために。

表情のない人魚が微笑んだ気がした。人魚はジンジャーの首を取って、まっすぐと海面まであがっていく。ヒレがたなびく姿は春風に吹かれる薄いオーガンジー。「何処まで美しいのだろう、この、人魚という存在は。」そう思えば、ジンジャーのみぞおちあたりがぐつと詰まった。

海面上がると港は目の前で、もう自分で泳いで行ける距離にあった。振り返ると、すでに人魚の姿は見当たらなかった。彼女らに人間の言葉は必要としない。だから二度、助けられた命を、彼女らに尽くすことを誓おう。

*

海はまだこんなにも美しく見えるのに、人魚たちはかつて『人魚と暮らす町』と呼ばれたこの町から離れていってしまった。人間に怒りを抱いているのだろうか。恨んでいるのだろうか。仲間の死を悼むのだろうか。ジンジャーは日の出に照らされた海に向かって大声を上げて泣いた。

美しい貴女たちを追いやってごめんなさい。絶対を守るから、絶対に取り戻すから。いつか戻ってきて欲しい。

コーラルレッドの海は何も応えず、静かに風ぐばかりだった。

*

Inspired by Cocco's MC from LIVE EART

7th July 2007

「沖繩の女なので少し沖繩の話をお願いします。沖繩の海はまだ美しく見えます。ジュゴンなんか見た事がない人が付けた『ジュゴンの見える丘』っていう丘から臨む海はまだ、とても美しく見えます。その海にアメリカ軍のヘリポート移設が決まって、国はもう着工のために海底調査機を入れて、もう乗り出してます。どんなに声をあげても拒絶しても諦めなげやいなことがあんだって、どこかで覚悟しなきゃって思い始めていて。それで、かといって沖繩の人が全員そのヘリポートの移設を反対してるかって言ったら、そうじゃない事実もあって。船と鞭の……ヘリポートが鞭だったら、飴って言う施しを受けてる大人の政治があ

る事も事実で。そうじゃなくても私たち人間がぶちこわして来た尊いものがいっぱいそこにあって、それを無くして失ってから悔いて泣くしかないのになって思う毎日でした。でも、先月その海にジュゴンが帰ってきました。ちょうどそのヘリポート移設の海の、ちょうど国が設置した海底調査機の真上の、バカみたいに綺麗な海の上に、ジュゴンが二頭泳いでいる姿が映像に取められて、そのニュースは沖繩中に駆け巡りました。今まで、自分は政治家じゃないし唄歌いだから分からないけど歌うしか無いって多分やって来たけど、でも、六月二十三日の慰霊の日に行政展のジュゴンの祈りみたいなあの時、こー達はなにも守れなかったしなにもしてあげれなかったしプチ壊してきただけなのに、それでも戻って来てくれたジュゴンに、こーは一生かけて向き合っていくかといけねえと思いました。多分そのジュゴンのニュースが内地でどれだけ流れたかは知らないけど、とっても美しいジュゴンでした。……こんなよ、公共の場所で、しかも人様のイベントで、こんなたくさんの方がいるところで、でも今日はわがままに歌わせて欲しいと思います。次の曲を、あのジュゴンのためだけに歌いたいです。」

【了】

お読みいただきありがとうございました。
この物語を書ききるには私にはまだ見聞や視野の広さが不足しています。
いつか完成させられるよう祈ってください。
普段は小説を主にエッセイ、詩句、写真など様々な表現方法を使い、
日常に彩りを添えています。

*

みかげ

Mikage

Twitter: @__mikageeeee
<https://lit.link/Hiraeth0croeso>

シュピーゲルが熟れたら

由良

僕は彼女に最初にもらった手紙の文字を思い出して、目の前の賢そうな切れ長の瞳からは想像もできない、お世辞にも綺麗とは言えない、子どもじみた丸文字だ。

（初めましての人に言うのもなんですが、言います。世間的には、すがたかたちが同じ人間はかけがえない運命的な存在だなんて言われているけれど、個人的には瓜二つの人間なんて気持ち悪いだけだと思います。それでも、気持ち悪いと思うものを遠ざけていてはいけません。そのままでは、生きていくのが苦しいままです。世間の気持ちが理解できないままでは、また同じ過ちを繰り返してしまいます。だから君にこうして手紙を書いています。まずは君が私と本当に同じかどうか確かめたいのです）

初めて送られる手紙にしては、切実過ぎる内容だった。

これまでぶつけられたことのない種類のエネルギーを感じ取り、床につけた裸足の裏がうねった。鉛玉のような依頼を前にして、受け止めきれずに途方に暮れたのは確かだった。しかしそれよりも、一語一句に同意できることが恐ろしかった。

野線いっぱい、ギチギチに綴られたそれから目を逸らしたくなつた僕は、便箋を裏返して自室の蛍光灯の光に透かした。文字に沿ってひどい凹凸ができていることに気がついた。それはものすごい筆圧で書かなければ出てこない凹凸で、ちよつと取り扱いを間違えれば擦れた拍子に穴が空いてもおかしくはなかった。便箋と一緒に透かされた指先の橙と、下手くそな切りつばなしの爪の歪な曲線ごと、彼女の文字は僕の脳みそに焼き付いた。

鏡を見て自らの冴えない顔面に打ちのめされるように、録音した自身の声の響きの悪さを容易には受け入れられないように、僕は目の前の彼女を想像通り気持ち悪いと切り捨てなければならなかった。今日だつて僕と同じ角度で弧を描く線の線を確認して、気持ち悪いと吐き捨てなければならなかった。けれど、できないのだった。僕は僕らの繋がりを断ち切るためのとつておきの鉄を持ってきていたはずだったが、ついぞ取り出すことができなかった。第三者には気づかれないであろう肉体的な差異を自覚するたび僕は

ちは臍と臍が見えない紐で繋がれてゆき、あてもなく言葉
を交わすたびそれらの束がより太く、強固になってゆく。
その様子を、黙って眺めていることしかできないのだった。

「そうめんと蕎麦、どっち出る家だった？」

夏ね夏、と付け足した彼女は真つ白な台の上に肘をつき、
爪を弄っていた。授業中、派手な女の子が退屈をやり過ご
すように、こうして耽っているのをよく見かけるが、真正
面からしつかり見るのははじめてのことだった。目の前に
座る彼女は態度に反して地味な姿だった。シンプルなグレ
ーの丸襟のプルオーバーは、色味やデザインの凝った服を
好んだという彼女の肌を比較的青白く見せた。恐らく、マ
スクを着けているせいでもあった。

「何その質問」

「こないだ同室の子と話してて、その話になって。家によ
ってどっちかに偏ってるらしいって初めて知ってたさあ」

彼女が爪弄りをやめ、こちらを見た。

僕は向かい合って座り、透明の板越しに互いの瞳を探
り合っていた。静かで薄暗い場所だ。どこもかしこも白く、
余計なものは何もなかった。洗練されている、と言っても
良いかもしれない。洗練された場所で、わずかに緊張感を
纏わせ、とても素朴な話をしている。

「どっちも出たね」

「どっちもおー!? いやどっちもは欲張りすぎでしょ」

「そうかな。その時家にあるやつか、まあ大体茹でる前に
どっちがいいかリクエスト聞かれてたな……谷田さんは？」

質問を返すと、それには答えず食い気味に彼女が言った。

「その『さん』付けで呼ぶのやめてくんない？ なんかゾ
ワつとすんだよね。あと妙な距離感じて嫌。余計ゾワつと
する」

いや、感じて当然だろ。とすかさず突っ込めるほど、二人
の仲もフロアも温まっていなかった。僕は彼女の斜め後ろ
の席で黙々と机に向かう制服の背中に目をやり、一体何を
聞かされているんだと思われていやしくないかと不安になっ
た。これでも頑張つて口調を崩している方だ。普段なら二
回しか会ったことない相手に敬語を外したりなんかしない。

谷田杏奈。谷田と書いて「やた」と読む。かの有名な計測
器メーカーと読み方をよく間違えられるという。友人には
「やたちちゃん」とか「やつちゃん」とか、ちよつと転じて
「やたんな」とか呼ばれているらしいが、僕は頑なに谷田
さんと呼ぶことに決めていた。大して仲良くもない相手に
突然「ちゃん」づけなんてできるわけがないし、変化系には
もはやついていけない。大体、名前を崩す必要などどこに
あるのだろう、とこれまでの自身の人生を振り返りながら

そつと嘆いた。

思えばほとんど本名で呼ばれたことがない。僕を本名で呼んだことがあるのは家族を除けば小一の時のクラスメイトと歴代の担任の先生だけだった。二谷京平という素晴らしい苗木と名前は、どちらもそのままでは採用には至らなかった。僕の両親はこの名付けに大層誇りを抱いていたから、絶対に家庭でも京ちゃんだとかキョンだとか舐めた呼び方はしなかった。しかし、素材をそのまま美味しく頂いて欲しいなんて願いは生産者のエゴに過ぎない。小学生時代は「ニタニン」とかいう色素沈着でもしそうなあだ名をつけられていたし、中学時代は「ニタニタ」なんていつも気味の悪い笑い方をしているようなあだ名でいじられるし、高校時代は「なんかそれタニタ食堂に似てね？」と誰かが言い、卒業するまで「タニタ」と呼ばれ続けた。つまり彼女がよく読み間違えられる名前と同じなのだった。

「うちはね、そうめんだったよ。金なかったからね。親再婚してからは食べてないな、そうめん出ないし蕎麦食う時は大体出前だったけど別に夏だからどうってわけじゃないし。待って、蕎麦は年越し蕎麦だけだったかも」

やべえ、全然覚えてないな、と谷田さんはぼやいた。

「新しい方の家に行くってからのこと、全然だ」

彼女の実親は離婚していた。幼少期は貧しかったが、共

に家を出た母親が医者と再婚し、高校入学以降はタワーマンションの上層階で暮らしていたという。

尻の置き所が悪い気がして座り直すと、椅子が安っぽくミシミシッと軋んだ。僕だけが緊張しているのはフェアではない気がして、どうにかリラククスした状態を作ろうと背もたれに身体を預けてみると同じ音が鳴る。耳障りだったので、やはり背筋を伸ばし寄りかからずにいこうと決めた。椅子は年季が入っているのか、表面の合皮も傷だらけだった。けれど、ここまで座り心地が悪いのは、きつと椅子のせいだけではなかった。

「最近ずっと引き籠っててさ、お風呂とかも全然入れないし、ワクチンも後回しだよ、学校で受けさせてくれるのっていいよね、あ、受けたよね？」

彼女は大学を辞めていた。話を聞く限りでは、真面目で勤勉だったらしい。もし大学を辞めていなければ僕のように就職活動に苦しむこともなかっただろうし、今頃卒業旅行の計画を友達とわんさか立てて、それが全部感染症で潰れた事実を憎んでいるに違いなかった。

「受けたよ。二週間後くらいに二回目」

「熱とか出んの？」

「いや、全然。人による」

会話が途切れた。彼女がまた爪を弄りはじめた。聞くと

ころによれば、僕と出会う前、あの爪はかなりゴテゴテしていたらしい。やることなくてき、無心になれる系の趣味探してて、ある時パツと閃いて百均に道具買いに行つて、はじめて、そしたら案外ずつとやつてられて。多分陶芸とかと一緒に、と一度目に会った時に話していたことを僕は思い出した。僕は、何の色が好きだった？ と彼女に問いかけた。爪の色は薄いピンクとか黄色とか大人しい色が多かったよ、だけど本当は青が好き。ベイスターズみたいなはつきりした青ね、と彼女が答えた。ライオンズじゃなくくて？ と返すと、ライオンズは紺だよ紺、紺だけじゃないけど、と言つて腕と足を組んで椅子ごと前後に揺れた。

椅子はキィキィうるさく鳴った。詩的な文面を思い出した僕は、青を空の色や海の色に例える方が「らしい」と思ったが、突然球団で例えたことが引つ掛かった。思わず、ベイスターズのファンなの？ と聞いた。いや、全然、野球のルールわかんないし、と彼女は言った。ルールがわからないのにプロ野球のチームカラーに詳しくあったり、人生で唯一読んだことのある漫画が楳図かずおだったり、もやしを食べられないのに今まで付き合った男が全員もやしみたいな体型をしていたり、中学時代に陸上のジュニア選抜で世界大会に出たのに泳ぎはてんでダメだったり、本当によくわからない人だ、と思う。僕とは全然違う。

まずい、と思つた。

彼女には特殊能力があった。僕が彼女と僕は違うのだ、と自身に言い聞かせるたび、いつも大体似たようなことを言つた。まるで身体中の内臓全てに直接トンカチで釘を打ち付けるように、忘れるなど忠告する。心の声が聞こえてくるわけでもないだろうに、見計つたタイミングで僕の精一杯の自己暗示を否定するのだった。

彼女は頬杖をつき、口元だけで微笑んだ。

「二谷くんって相変わらず、私と同じ顔だ」

無数に穴の開いたアクリル板の向こう、笑う顔のすぐ側で、そっくり瓜二つの自分の顔が鏡のように反射していた。僕らは血の繋がらない、しかし科学的に証明された希少な「そっくりさん」なのだった。透明な世界で浮かび上がった僕の顔の中で、彼女と同じ形の厚みのない唇が、苦味を湛えながら、釣られて同じ角度に持ち上がった。

僕が生まれる少し前までは、自分のそっくりさんが三人いるという言説はあくまで都市伝説だった。今もある意味都市伝説に変わりはないのだが、当時はツチノコとか、かっぱとか、きさらぎ駅とか、人生にモテ期は三回あるだとか、そういう、生きていれば必ず耳にする空想とほぼ同列のものとして語られていた。それがここ四半世紀程で、突

然状況が変わったのだ。

二十年前、アメリカのあるバラエティ番組の一企画で某コメディアンのおそくりさんコンテストが開催された。出場した一般人のおそくりさんがあまりにも似ていたので別途企画で検査したところ、遺伝子配列が双子のように酷似していると判明し、瞬く間に話題となった。番組は続けて当人の知らない血縁関係がないか追加で調査したが、二人は全く別のルーツを辿って生まれたことが明らかになった。この一件以降、世界中からおそくりさんの遺伝子検査依頼が殺到し、何件かはバラエティ番組と同じケースが発見された。研究は日々進歩を続け、ついに五年前の春頃、誰しも自分の「おそくりさん」が地球上に存在し得るという可能性を示唆する論文が発表されたのだった。

「おそくりさん」現象はその恐ろしさを含めて神秘的な魅力を放ち、「おそくりさん」にまつわる話題は大衆にとつて格好の娯楽となった。情報社会による孤独から他者との繋がりに飢えた人々にとつて「おそくりさん」は神話であり、カルト的な熱狂を生み出す巨大な存在であった。巷では「おそくりさん」情報の闇取引が横行し、「おそくりさん」をテーマにした数多くのフィクション作品が発表され、観光特集では必ずと言っていいほど「おそくりさん」運を貯めるパワースポットが紹介された。人々は「おそくりさん」同士

で奇跡的に巡り合うロマンを求めていた。僕も今朝家を出てくる前に、朝の情報番組で「おそくりさん占い」を見てからここまでできた。ちなみに僕の本日の「おそくりさん」運は星五つらしい。

情報番組の星座占いが当てにならないことなんてこの世に人類が存在し始めた時から明白であるし、そもそももうすでに出会ってしまったのだから星の数など関係ないとはわかつてはいるが、では出会ってしまった僕たちにとつてあの星の数は何を表すのかと「おそくりさん占い」を見るたびにいちいち考えてしまう。願わくばもつと脳みそのリソースを他のことに使いたいものだ。このことを谷田さんに打ち明けると、他のチャンネルに変えたらどうか、と真つ当な指摘を受けた。残念ながら、今どき国営局以外の民放局すべてが「おそくりさん」占いを取り入れているのだ。他の局がダラダラと情報番組を放送している間、国営局はすでにお料理番組や体操番組に切り替わっているから朝のうち世の情勢をチェックするという用をなさないし、そうするとこれまで見ていた局に落ち着いてしまう。「おそくりさん」はもはや現代社会において避けられる話題ではなくなってしまった。もう少し世の中は現実存在する「おそくりさん」に配慮した社会を作らばいいと思う。

(了)

はじめまして。由良と申します。
普段は二次創作を中心に活動していますが
今回の企画を契機に一次創作にチャレンジしてみました。
どうかみなさんに楽しんでいただけますように。
実は続きがありまして、下記 URL よりお読みいただけます。
<https://privatter.net/p/10239395>
気になった方はぜひ。
(小説本文にヒントのあるパスワードを設定しています。)
いつか文フリに出るのが夢です。

*

由良

Yura

Twitter: @__crck

Fedibird: <https://fedibird.com/@notnoah>

びょうびょう
眇眇抄

シキウタヨシ

弾丸をはなつみたいのことばとは
かんたんに他人を射抜くものだね

他人を刺すことばしか持たないぼくならば夜の数だけ死に損なってる

風よ立て吾を巻き込め青嵐あおあらしこの憂い顔など、飛、ん、で、ゆ、け

階下^{かいか}では笑い声^{かいか}がしてぼくはただ宙眺^{ちゆう}めながら聞いてなかつた

すごい音^{おと}たてて閉^しまったドア^{ドア}だつてたぶん全部^{ぜんぶ}がおれのせい^{せい}だろ

傷^{きず}ついたりとかいうつもり^{つもり}はないけれど叶^{かな}うならいまピース吸^すいたい

蹴てた土地ばかりが地図に増えてゆく さ霖うしかない吾は *déraciné*
デラシネ

雨霖の薨叩くは誰の啖泣いてはいない涙が田ない
いらか とが

久方の虱に打たれてひなげしの罫の俯くまま落つ無氣
うつむ むざん

から梅雨に久方の雨を乞いいつもあじさいの色は褪せゆくばかり

野分のわき去り束の間の晴れすぐかげる　なにか見いだせそうだったのに

奥山のそのあまり透明がため魚うおらの棲すまぬ水になりたい

デ・キ
リコ
のよう
な街
並み
歩
き
い
つ
勝手にしろよ
勝手にするさ

い寝るとき夜のくろさに紛れいっしんと孤独身に降り積もる

今更に泥
跳ね
がひとつふえた
とてきれいでない生きていくだけ

了

シキウタヨシ

歌歴 2008～2011(断筆)2018.8～現在に至る

デイスコグラフィー

ー feel blue

想ひ歌

id × 198

R (未発表)

犛然抄

季

それでもせかいはきれいだ。

孤独について話そうか(制作中)



@gucino_utys (twitter)

<https://potofu.me/skutyys>

今回、ひょんなご縁からDownatsさんに拾っていただき、企画に参加させて
いただくことになりました。こんな無名の野良歌詠みですが、
皆さんの末席に置いていただき、感謝することしきりです。

サテ、根無しはどこかの空の下、今日もぶつくさ歌うのでしょうか。

末筆になりますが、企画に参加させて頂きありがとうございました。

2023.7.14

木漏れ日ランチタイム

東藤雅

残り十五分。教室の壁にかけてある時計が試験の残り時間を指していた。シャープペンシルが紙の上をせつせと走っている音に混じって、小さく時計の針が動く音が聞こえて、なんだか、退屈だし、心地好いような気がする。

ふと時計から視線を下げればピッチリと埋められた解答欄。これまでの試験の中で比較的範囲の広いそれは、幾分か難易度が高かったようだが、解答欄を埋める手が止まることはなかったように思う。実際こうやって時計を眺めては、退屈で目を時々瞑って秒数を数える暇な時間ができてしまっているのだ。

はやくおわらないかなあ、などと思いながら時々頬に触れるクーラーの冷気で私は大人しく涼んでいた。

ほどなくして、ゆるゆると明るさが残る臉の裏が暗くなり本格的に眠りに落ちてしまいそうな頃に、担当の教師の終いの合図の音が鼓膜を伝ってきた。驚いてしまつて、ち

いさく体を揺らしてから臉を開く。

「解答用紙と問題用紙を前に重ねるように、一番後ろの席の人が回収してください」

教科分聞いたその言葉に素直に従って、緩慢さが抜けない動作で用紙を前に進みながら集める。集めきつて席に戻る頃には抜けていなかった眠気もなくなつて、やつと試験が終わることに對してはやる気持ちでいっぱいになり、つい口元が緩みそうになつた。

先生が用紙をまとめながらうずうずとしている生徒たちに声をかける。この先生の話は特別簡潔であることをよく知っているからこそ、はやる衝動を抑えられない私は既に机に手をつけて立ち上がる準備をしていた。クラス全体を一瞥してから、先生が溜めていた言葉を声にした。

「では、これで試験は終わりです。みなさんよく頑張りましたね。お疲れ様でした。起立、礼、ありがとうございますました」

「ありがとうございますましたっ！」

瞬間、自分たちの声に被さるようにしてチャイムが大きく鳴った。普段よりも大きく声にしたあいさつもそこそこに、私は真後ろにあるロッカーに入っていたスクールバッグとお弁当の入った鞆を手にとる。

「小百合さま」

掛けられた声には少しばかり聞きづらかったフリをして、私の席を囲うようにしたクラスメイトたちに明快で弾んだ声を向けた。

「また、週末が開けたら、誘ってちょうだいね。ごきげんよう！」

光のように微笑めば、私を引き止めるクラスメイトたちの手は宙へとぶらんと浮かぶだけだった。

もう、ここ二週間ほど誘いを断り続けているかもしれないなあ。寂しさの残るクラスメイトの瞳を思い出して、すこしばかりの罪悪感をおぼえながら、私はきしむ廊下を駆け抜けた。

*

「おせーよ」

若干の息切れをしながら、教室の先にある部室棟の校舎裏まで来ると、木漏れ日に満ちたベンチには先客が既に居た。先客の綺麗に揃えられた前髪から覗く鋭い視線が、光るように私を寸秒だけ見つめる。だらしなく座るスカートから長く伸びた足が大胆に組まれていて、火照る頬にさらに熱がくわわった気がした。

「伊織さん」

「腹減ってても大人しく待ってやってるんだから、もうす

こし早くこいよ」

私より大きな伊織の手のひらが隣に空いたスペースをゆったりと叩く。それに招かれるようにして呼吸を整え切った私は、激しく校内を駆け回った後の疲労感に襲われながらもものろのろと席に座った。

「これでも早く来たんですけど」

「どうせ取り巻きに挨拶して遅れたんだろ」

「ストレスフリーの学園生活には必要な事ですわ！」

「ハイハイ、そうですかい」

相も変わらず、私の話を飄々として受け流す彼女にしっかりとしながらも、自分と伊織の間にできた少しのスペースに靴から取りだしたお弁当をふたつ置く。自分の弁当箱よりも一回り大きくてずしりとしたピカピカの弁当箱を伊織に手渡して、私はついに秘めていたことを興奮したように伊織に話した。

「伊織さん！なんと、今日は伊織さんの好きな甘めの卵焼きが入っていますわよ！」

「なっ！」

途端、切れ長の目が見開かれてまんまるな瞳がよく見えた。あまい卵焼きが伊織のお気に入りだというのは、初めておかずを分け与えた時に知った。彼女のファンの間では有名な話だったらしいけれど、当時の私は知らないまま伊

織に餌付けをしてまんまと懐かれてしまった。

でも、こうして持つてくるお弁当の中に甘い卵焼きを稀に入れてくると普段伏せられている瞳が途端に顔を出してくれるのは随分とかわいらしいとおもう。伊織の瞳が輝き出すのを思い出しては卵焼きを丁寧で作っていることは、きつといつになつても言えないのだろうか。

「いただきます！」

「はい、いただきます」

好物が入っていることが余程うれしかったのか、伊織はすこしもたつきながらも、弁当箱の蓋を開けて、箸を手にとつてから思い出したかのように食事の挨拶をしていた。

まるで子供のような伊織の姿にくつくつと笑いが込上る。顔を見られないように小さく笑っているとどうやら伊織に気付かれてしまったようで、既に卵焼きを口に含んで顔が緩んでいた伊織が私に『おい！』と声をかけてきた。

「笑っていませんわよ」

「まだ何も言つてねえよ！あと笑つてるだろっ……！」

「一番に食べるのが可愛らしいなあとは思っていましたけれど、笑うなんて、ねえ？つく、ふふ……」

「思い出し笑いがいちばん恥ずかしいんだよ！」

そうやってキャンキャンと子犬のように私に吠えてから伊織は拗ねたように他のおかずを口に放り込んだ。パクパ

クと大きく開く一口が見ていて気持ちいいなあと、その横顔を見つめながら、私も一口卵焼きを口に作る。

彼女と過ごすお昼休みは、私の中のストレスフリーな学園生活計画に必要不可欠な要素である。気の許せる対等な友人というポジションにはいままで誰もいたことはなく、その席に座れる伊織という存在は私にとつての唯一の特別だったのだ。

王子様として、学校というこの狭いコミュニティの頂点に君臨する彼女は、王子様の皮を脱ぐ休息場所がなかった。部室棟の裏にある誰も立ち寄らないベンチという条件としては最高の場所と時間、そして彼女の好みの食事を私が提供するところで、必要な友人関係を私は取得したのだ。

ホクホクと心地好い空気に身を任せ、リラックスをしながら、すこしばかり苦戦した煮物に箸を付けてみる。うーん、うまく出来ている。味見はしたつもりだが、ふと伊織の反応が気になって伊織の方向をみてしまった。バチリと、珍しく真面目くさった瞳が私を見ている。おもわずギョツとして箸の動きを止めて、見つめ返してしまった。

「な、なんですか？伊織さん、そんなに見つめて」

「いやあ、前々から思つてたけど、小百合って食べ方綺麗だよな」

「はあ……、そうなのでしょうか？」

「背筋は綺麗に伸ばして、うーん、なんか、言い方分らないけど、綺麗だと思っ」

私を見つめたまま伊織は言い切つてから、また弁当箱に引き合つた。伊織は物言いが大雑把だ。相手に伝えようとする気力が感じ取れない自分だけの言葉。けれども、それが私にとってはどこまでも青く見えて、純粹で美しいと思う。彼女の隣に座つて落ち着いてから随分と経つたのに、頬がまた火照るような気がした。

「こ、光栄ですわね！ありがとうございます！」

「なんだ、照れてんのか？ふうん、可愛いとこあんじゃん」

「もうっ、適当言わないでくださいまし！」

「言つてねーよ。」

けらけらと伊織がまた大きく口を開いて笑つた。頬の熱が収まらないような気がする。ぎこちなくなり始める自分の挙動を誤魔化すように、普段はしない勢いで慌てるように胃の中にご飯を流し込むと伊織が箸を止めてニンマリとした顔で私の様子を覗き込んでいた。

「めずらしく。お前がそういうことするの」

私の顔を見てから、伊織は変に嬉しそうな表情をして、気分が良さそうに元の位置に戻つた。

「この時間はお前がくれた休息の時間だと私は思つているけれど、肝心なお前が気を休めるとこなんて見たことな

かつたからな、ん、なんていうか、嬉しいよ」

また、曖昧で大雑把な彼女の伝え方だ。

でも、伊織は次の言葉を考えるようにぼんやりと空を見つめてから、たつぷりと言葉をためて私と向き合つた。

「小百合は私にとって唯一の対等な存在だからな。お前が、私のように気を休められていると自分のことのように嬉しく思えるんだ」

細められた瞳から注がれる視線が熱いように感じた。私だけが満足するために、多少なりとも打算的に作つたこの時間が伊織にとつての特別へと昇華されていることが、珍しくハッキリと明言された言葉と、その表情からありありと伝わってきて、いよいよ私は火照る頬を両手で押さえることとなつてしまつた。

「……卵焼き、ひとつあげます」

「えっ！？マジ！？ラッキー！」

私たちを囲う木々の葉がささやくようにかさかさ音と音を鳴らして揺れる。涼しい風が私の頬と伊織の長く伸びた美しい黒髪を撫でた。

あんなに長く感じたテストの残り時間よりもずっと短く感じるお昼休みが、私と彼女にとつての特別だ。あげた卵焼きを口にして幸せそうに表情を緩ませる彼女は、初めて食事を共にしたときのようなようだった。



小百合は私にとって
唯一の対等な存在
だからな。

お前が、私のように
気を休められていると
自分のことのように
嬉しく思えるんだ。



.....



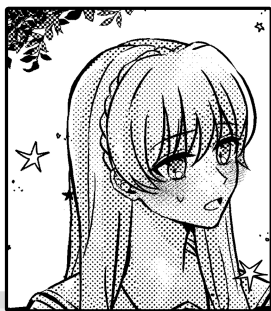
：卵焼き
ひとつ
あげます。

えっ!?
マジ?!
ラッキー!



@mc_lolo10

終



宝来 小百合

ほうらい さゆり

- ・中等部一年 お姫さま
- ・世話焼き
- ・割とパッション系
- ・料理は得意
- ・財閥のご令嬢
- ・伊織の前では泣らしい



藤原 伊織

ふじわら いおり

- ・中等部三年 王子様
- ・普段は爽やか硬派
- ・素はヤンチャ俺様
- ・御家元
- ・卵焼きの味にうるさい
- ・友達がいない

東藤雅



初めまして！東藤雅です。
今回は、二人の少女の
日常だけれど、ちょっとだけ
特別な時間を書かさせて
いただきました。
キャラクター同士の距離感を
つかむのに苦戦しましたが
とても楽しかったです。
改めて、ここまで読んで
くださった皆様、
ありがとうございました！



Twitter @mc_lolo10

Misskey @rose_miyaa08@misskey.design

夢は夢である。それ以上でも以下でもない。

眠りについて、初めて広がる世界。夢。とある学者は記憶の整理と説き、またある者は予知だと言う。

貴方はどうだろうか。夢に何を託すのだろうか。

私に問い返されたら、こう答える。夢は、願いであると。

ここでしか逢えない人、ここだから味わえる幸せ。そんな幻想は甘えだろうか。大人気無い悪癖だろうか。

私はあらためて思う。夢は願いであると。

今宵の夢主は、何を願うのだろうか。

貴方がいた。

此処は、貴方のそばで迎えた九月十五日。ちょうど五年を迎えた日。ベッドサイドに飾られた卓上カレンダーがそう教えてくれた。十五日を囲む控えめな丸印、その中央には二人の名前。

ふと足音が近づいてきて、寢室のドアをそつと開いた。目が合い、互いの口元が緩む。

「おそよう。ブランチは何にする？」

ああ、そうだった。特別な日にも寝坊しちゃう私を、当たり前前に受け入れてくれる優しい人だった。

「パンケーキ食べたい。ふわふわのやつ」

伏し目で沈黙する様子は、迷いながらも最善策を考える素敵な姿。やがて視線が再び交差する。

「ふわ、程度ならできるかな。頑張ってみるね」

頬を撫でる手が、堪らなく優しく懐かしい。二度寝するふりをして、枕に涙を預けた。

次第に広がるバターの甘い香り、コーヒーを挽く穏やかな音。りんごを切る軽快なリズムに、私を呼ぶ声。

あんなにささやかなことが、こんなに幸せだったなんて。

私、あのときどうして謝らなかつたの。ほんの一言、交わただけで、貴方のパンケーキを味わえる幸せが、今も身近にあつたかしら。ほんの少し、違つただけで、二人の日常が続いたかしら。

悔しいなんて、意地を張らずにいればよかつた。「許して」の本音も「愛してる」の真心も、喉元から飛び立てぬまま。

「食べないの？ 冷めちゃうよ、ユキ」

食べきってしまったら再会は終わり。直感がそう警鐘を鳴らしていた。そんな不安などつゆ知らず、貴方はにこにこパンケーキにハチミツをかけて優しく誘う。

「甘えん坊だなあ。ほら」

フォークに乗せられた一欠片。ずっと取り戻したかつたその笑顔。

ふわふわのパンケーキは甘くて、美味しくくて、ほろ苦い。

夢主 ユツキ

自分はいつも諦めてばかりで、大事なものは何一つ残っていない。諦めることは簡単。これを手放したら、もっと良いものが入ってくるのだと願望成就を先延ばしするだけだが、そう言い聞かせて数千回。もっと良いものなど幻想だと断言出来る。この世に選択肢は星の数ほど在りながら、選べるのは、選ぶことを許された人のみだからだ。

自分は、一番大事な君に、自分を選んで欲しかつた。

「ユツキ」

放課後の教室に響く自分の名前。軽いスクールバッグを片手に君がやってきた。二人きりの教室は、静けさと青臭い思慕で満ちていた。

「ソラ、また授業サボつたな？」

「だってユツキの授業の方が面白いもん」

「これは授業じゃなくて、補習だよ」

ソラが好む居場所は図書室か屋上。教室にはひとけの少なくなつた頃合いを見計らつて姿を現す。ソラは自分と違い、杓子定規な空気が似合つていなかった。

自分にとってソラは妖精。他の人は多分、あの自由に飛べる羽を見ようとしていない。

「ユヅキ、今日はこれ教えて」

机の上に置かれた古文の教科書。指示通りに開くと、封筒が挟まっていた。

「家で読んで。明日、お返事ちょうだい」

「今じゃなくて？」

「うん。明日来る理由が出来るから、明日がいい」

「勉強しに来なよ」

本当は、自分に会いに来なよって言いたかった。自分を全部の理由にしてって、伝えてしまいたかった。でも、そんな独りよがりな気持ちなんか、迷惑をかけるだけだから。俯く君に伝えた。

「わかった。明日、約束ね」

その明日が来て、自分は待った。教室でひたすら君を待った。結局、妖精は姿を見せなかった。

手紙の中身は「好きって言ったら嫌いになる？」。

伝えたかったのは「両想いは人生初です」。

そこから半年間、自分は待った。先生は急な引越しだと言っていたが、真相はうやむやなまま。行方の分からぬまま、卒業した。

恋。それは落ちることを避けられぬ虚^{うつろ}。もっと他にいい人がいるはず、なんてアドバイスは、虚の中までは響かない。大切にしたいと思える存在を見つけた喜びは、強い。徹底的な喪失感を持ってようやく虚の蓋が開く。

「ユヅキ。手紙読んでくれた？」

放課後の教室の香り。静寂の中に響く、君の晴れ晴れとした声。これは夢だ。絶対にそうだ。自分が望んでやまない、迎えることのない過去だ。

「ソラ。あのね」

他の人なんか選びようがない。ずっと、君を選んだままなのだから。

夢主 水海月

皆が私を見上げて言います。

「綺麗だね」

二度と会えない貴方にこう答えましょう。こちらを見上げるその笑顔の方が美しいと。水流に流されながら、伝わるようにと願いました。水族館の、小さな水槽。ここが私の世界の全て。

夏は、水族館の夜が長くなります。夜祭りと呼ばれて、照度の落ちた館内を、色とりどりの光の粒が泳いでいきます。普段は青白い海を漂う私達も、時折虹色に染まるようになりました。

ある夜のこと。水槽の前に、幼い微笑みを発見。くるくると水流を巡りながら、その柔らかそうな頬を眺めています。しばらくして、「きれいだなあ」と褒めそやす君。どうやらその感動を共有する相手はいない様子。君の隣に行けたらなあ、と、眩いたら、不思議な海流に押されて気づいた時には海の外。君と同じ背丈のヒトになっていました。

ちょうど光の粒が私達を横断していきました。

「きれい」

私の声が君に届き、輝く瞳がこちらを捉えます。折角なので伝えました。

「君も、きれい」

でも、君は首を振ります。

「くらげの方がきれいに光るよ」

君があまりに可愛らしいから、私は初めて笑顔という喜びを得ました。

「私達は、光っていない。光を、もらっているだけ。そうやって光を感じられる、君の瞳がきれい」

君は考える表情を浮かべ、すぐ笑顔に生まれ変わりました。

「うん、君の瞳もきれいだよ」

触手ではなく手であれば、君と繋がるのが出来ます。手を繋いで、一緒に光の海を見上げました。私の世界が、ここで良かったと、そう思える日を迎えるなんて。私はもう一度、君の輝きを見つめました。

「君の世界に、笑顔と光が、たくさん集まりますように」

二つの手で抱きしめて、私はお家へ帰りました。豊かな虹色の海へ帰りました。ここが、私の世界の全て。

君が見つけてくれた光を胸に、私は再び目を閉じました。

(了)

自己紹介

初めまして、こんにちは。木之下ゆうりと申します。普段の活動は小説、漫画、イラスト、エッセイなど好きなものを好きなように、といったふうに創作しています。メインは小説です。

作品のテーマは「すべての愛のかたち。可能性の居場所」。やや仰々しいのでシンプルにすると、制約のない世界観です……あらら、あまり上手に言えていないような。

「美しい夢」は、今年の十一月をめどに書籍にしようという計画している短編集です。構想段階にあったものを、こちらの企画にあわせて三編まとめました。構想から全くスタート出来ていなかったのも、一步を踏み出すとても良い機会になりました。ドウナツ様、ありがとうございます。

さて、各話を読んで「登場人物の特性が曖昧だな」と思われた方も多いでしょう。主に性別や年齢をぼかしている点、これは取えてそうしています。重きを置いているのは大切な人がいた、或いはいるという事実で、詳細な輪郭を描くことはさほど重要ではないのです。少なくとも、この物語には。想像の余白を持たせた書きぶりが、目下の関心事であり目標です。

ただ、この先の夢については未定。話のネタがいくつつかあ

って、そのうちの一つは男性の立場を想定しているため（ストーリー展開的にそうしたい）、本作も好きなものを好きなように書くスタイルになるのかなと、予感しています。

さて、作品についてはこれくらいにして、折角ですから私自身について語りましょうか。

興味を引かれる対象は儂さを感じさせるもの、蝶や生花、月の満ち欠け、人生など。物事の本質は何か、考えを巡らせることが好きで、作品のテーマやスパイスとして取り入れる傾向があります。例えば過去と記憶、それらが人格や未来に与える影響、人が人を好きになる理由は何か、など。

一方で「好きだから好き」という真っ直ぐな愛情表現にも好感を持ち、故に作風は濃密なヒューマンドラマからほっこりとした日常まで幅広いです。

……これも上手く言えていないような。掴みどころがないと感じられた方は、ぜひ個人サイトやカクヨム等をご覧ください。またいつか、お目にかかれることを願っています。

木之下ゆうり

各種リンク集 https://inktr.ee/kotonone_artworks



てのひら ものがたり
掌 の 物語

〔vol.1 切り抜き風〕

二〇二三年七月二十九日 発行

著 者 木之下 ゆうり

シキウ タヨシ

東藤 雅

みかげ

由良

発行者 ドウナツ

<https://donats.com>

support@donats.com

著作権は各著者に帰属します。

木之下ゆうり

シキウタヨシ

東藤雅

みかげ

由良

(50音順敬称略)

Projected by Dounats

